

2002年11月13日早朝、ローランド・ハナが、ニューヨークの病院で亡くなった。

享年70。死因は心臓疾患だった。10月には日本でコンサートを開いていたが、その直前に体調を悪化して、アメリカから帰郷したとの出来事だった。日本公演が最後のライブとなり、日本のレコード会社ジャニーズの制作する本作品がローランド・ハナのラスト・アルバムとなった。

編んで笑顔を作りつ、後の笑顔を取りかえてみよう。

ローランド・ハナは、1932年2月10日、ミシガン州デトロイトに生まれる。父は建築家だった。子供時代から独学でピアノを学んだ。初めはクラシックを専攻したが、年代が代わりジャズのジャズクラブなどでジャズ演奏に平然見入りを見られる。22歳であつたためニューヨーク州ジャズフェスタのイーストマン・スクールに入学したのち、ニューヨーク市のジュニアード音楽院に入学。

1958年にベニー・グッドマン楽団に入団するのを皮切りに、59年には、チャールズ・ミンガスのグループに参加するなど、有名なジャズメンとの共演を重ねる。サラ・ヴォーンの特典ジャズバンドとつとなり、ジャズ・クラブ「フィグ・スモーク」を中心に、ピアノ・ライブを率いて活躍したりする。67年から74年まで、サド・ジョーンズとメル・ルイスの双頭オーケストラでピアニストをつとめ、ヨーロッパにも楽団を結ぶ。

1960年代後半アメリカに滞在したのには、黒科コンサートを開いて、青少年のための音楽教育資金を集めるなどの貢献もあり、リベラ大統領の献士章を授与される。「サー」ローランド・ハナという称号は、このさの勲位に由来する。

サド・ジョーンズ・メル・ルイス楽団の活動と並行して、1974年から、フラック・ウェス、ロッド・ガーナー、ベン・ワイリーと「ニューヨーク・ジャズ・カルテット（NY Quartet）」を組成し、楽団活動を続ける。80年代

80年代以降は、ピアノ・ソロにも力を入れたと同時に、アメリカのみならず、ヨーロッパ日本でも国際的な規模の演奏に参画し、ケニー・バレル、エルヴィン・ジョーンズ、フレディ・ハバード、ジム・ホール、ステファン・グラッベッ、ディーン・ディアー・ブッシュウェーターなどと、多岐なミュージシャンに囲まれて、多面的なヴァースァリタな才能を発揮する。

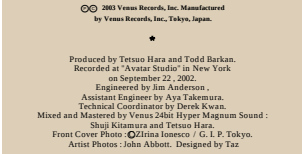
また、ニューヨークのクイーンズ大学のジャズで主任教授の要職につき、ニューヨーク市立大学ヤードン・コッポランド音楽院でも学生生活の指導にあたる。学生派の名人でもあつた。

ローランド・ハナは、クラシックの演奏にひいて、同じデトロイト出身のトニー・フランナガンと並んで、クリアな音色、明快な指さばき、左手の巧みさなど、欠点のない、緑色の色合いが印象的にして知られる。だが、そのぶん個性がうすいと思われ、かえって懐いていたらしいのである。ローランド・ハナと名前が響いて、即座に代表作を挙げるファンが多いのはこのせいだ。

しかし、ハナは、「エドワード・ガーナーにインスパイアされた独自のジャズ人感と、アート・テイタムを彷彿させるオーケストラ的な表現力（バグワグエ・ブレーション）を一体化する、スケールの大きなジャズ・ピアニストなのである。彼のピアノの響きの美しさと高度な即興能力が日本人の日本は、その美力の高きを知りたえるアルバムが



サー・ローランド・ハナ Sir Roland Hanna (piano)
ロー・カーター Ron Carter (bass)
グラディ・タム Grady Tate (drums)
録：2002年5月22日 アタナ-スプロ、ニューヨーク



できるのを待ちきれずにいたにせいで、そして、時代が21世紀に入るやいなや、ローランド・ハナはヴァー・ソート、現代で、ド・ドゥーム」とミラ・パリ、ニューヨーク」という傑作をつとけに記録し、文句なしにジャズ・ピアニストとしてのキャリアの頂点に到達することになった。前者では、ストリートなスリグ感を感じられ、後者は、ジョン・ロランドに勝るにあふさいい、格調高く、小粋なプレイに結ばれて、ローランド・ハナというピアニストの、音色の美しさ、高度なテクニック、濃厚な存在感を見せつけた。

この絶好調の波に乘って、ヴィンセント第三「夢のあと」では、最もやまぬクラシック作品集である。作曲家は、「ド・ドゥーム」とミラ・パリ、ニューヨーク」とも通って、ジョン・カーターでグラディ・テイタム。カーターは「ニューヨーク・ジャズ・カルテット」での相棒でもあり、御手こたえである。一方のド・ドゥームは、ハナと同年の、また、ハナと同じく多彩なキャリアを持つベトナムであり、理想的なペア陣になっていよう。

さて、冒頭曲はシェーベルの「セネター」村上春樹の「海辺のカフカ」に全面的にフィニッシュされたことでシェーベルと再評価の光もあるが、ハナのシェーベルの解釈のなんとスマートなことか。シェーベルは31歳の若さで夭折した天才だが、ハナの演奏にはそうしたにもロマンティックな伝統を可及するまで、不健康な響きはない。あくまでも清潔に美しい演奏である。これが、ローランド・ハナの死のこの瞬間の演奏は誰が信じるようか。

つまりは、健康と夢のあとでフォールの歌曲曲が、非常に現代的な響きが印象的だ。早卒の運命に横たわったメロディが、ハナの演

奏によってハーモニ二重かによみかえる。このアルバム全体に言えることだが、作曲は全て切り取り、もっと聴いていたいと思う気ささせる演奏が多い。巧みな演出と思ふ。

<ス・ズ・ズ・マイ・パイプ>はボロディンの作曲による。ハナの演奏はすべてが、これみよがしの名匠様の提示をおこなうことなく、ジャズとしての演奏のなかにも、クラシックメロディを、自然に、どこか甘くはみ溶けこませる。このほのぼのさのさじ加減が素晴らしい。気楽な態度のたの曲だが、ピアノ・トリオのためのオリジナルのように自然な響きに結ばれている。

そして、ショパン。クラシックインスパイアされたジャズ・ピアノのアルバムではかつてこのでなればしか聞かざることだが、まずはロン・カーターの超絶技巧のソロに驚かされる。私はカーターのベース・ソロは響きが良いと聞き書きしてきたが、こちらからメロディを弾かれてしまうと、ジャズが名人だ、と感心するよりも、もっとも、いくらかカーターが譲渡しても、後半に出てくるハナのピアノのラインのほうはまさに印象的。ベースの譲渡り、とピアノのきわめて自然な感じ。この対比が妙である。

5曲目はアルバム中唯一のハナの特典曲。さわやかなのに、物悲しい、思い遠く飛ぶ。タイトルはウィリアム・ブライの詩を連想させるが、「砂粒に世界を、野の花に天国を果す」という言葉に響を得た曲でもあろうか。軽いつながりのなかに神秘的な感覚が漂ってくるように思われるのだ。ジャズというより、詩を聴かせるような曲である。

つづいてローランド・ハナの「メロディ」、ロマンティックなピアノの名曲として知られるテーマだが、軽快かユーモラスな解釈で演奏し、ハナの余韻を感じさせる。軽いつながり、ノートのなかに、こぼれるようなピアノ・タッチの美しさがあふれ、やさしい情熱に誘われる。

次はモーツァルトの有名な「ピアノ協奏曲第1番」のテーマ、映画で有名な主題曲から、くみくみとおもしろい、オケストラとも知られた曲だ。ハナの導入したピアノが情緒をひきとるにせいで、ハナと同様クラシックに強いカーターのベース・ソロがファーターされる。あまりに有名なメロディだが、通好で流れてこれこそ、格調高い演奏に仕上がっている。

8曲目はあまりにも有名な「夢のあと」だが、リズム・パターンを新しくし、思い切った導入メロディのゴズル感を感じさせる。ハナの父親が録音されたこの、ハナが31歳のときに録音されていたにせいで、思いがけるように演奏だ。ハナがここでまたファンキーな側面を押し出すことはあまりないが、にかがわらず、まぶのブラス・フィーリングには洗練と格調がある。ジャズ・マンスなどとはまったくセンスが違うのだ。

最後はこのアルバムから「クラフタス」としてはいら、マラーの「ア・グー・ジョー、ルキ・グー・ジョー」監督の「無名に生きた」で、クラシックの名曲のこの曲でもっともビュラな演奏になったが、ピアノ演奏するのは至難の技といいたい。そんなこと言っても承知で、ハナのドット・ロマノフの精神にのみあてメロディを、あえて聴く、詩と響いてみる。そこからは言われるべき物語が生まれる。これほど清く響き美を美化して、誰んがドット・ロマノフに立ち上がったマラーといえるにせいで、ハナがラスト・パフォーマンスに、このななくふさいい勢でありである。（中略省略）